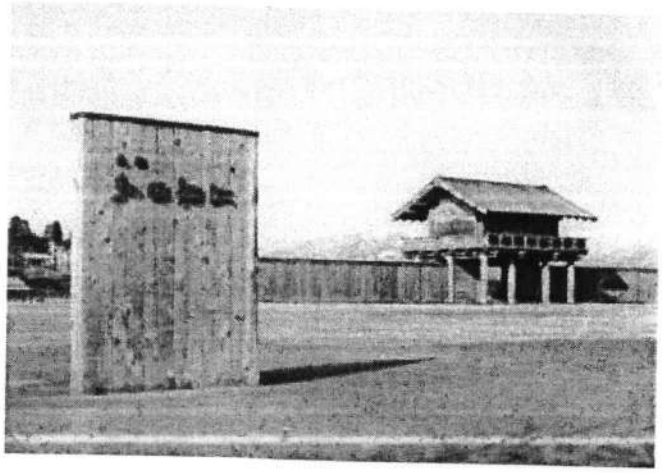
平成21年　まほろば会秋の旅行

資料

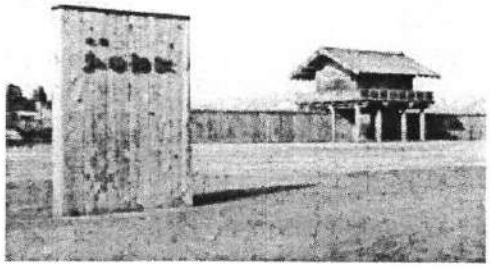


平成21年10月16日(金)～10月18日(日)

日程

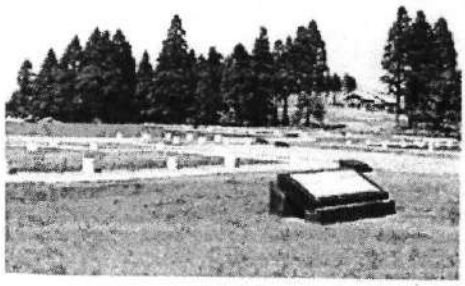
10月16日(金)	8時　30分	集合	JR大宮駅　南改札口前
	8時　54分	JR大宮駅出発	こまち　7号　（14号車）
	12時　4分	JR大曲駅到着	
	昼食	新幹線車中にて　米澤牛めし弁当を食していただきます。	
		払田柵・(秋田県埋蔵文化財センター) 金沢柵・(金沢柵資料館) 沼柵跡	
	宿泊	柵の湯	払田柵近くの公共の温泉です。 秋田県　大仙市　坂見内字一ツ森　149 (0187－69－3311)
10月17日(土)	8時　53分	角館駅発	
	9時　45分	阿仁マタギ駅着	秋田内陸縦貫鉄道　乗車
		角館～阿仁マタギ駅間を電車にて移動します。	
		マタギ資料館 根子集落(またぎの里)	
	昼食	北秋田市鷹巣町	割烹みよし きりたんぽを中心とした料理を予定
		北秋田市文化会館 伊勢堂岱遺跡・(藤株遺跡・胡桃館遺跡) 大湯環状列石・(ストーンサークル館)	
	宿泊	丸富ホテル	日本一しょっぱい温泉のしょっぺ～温泉です。 秋田県　山本郡三種町　森岳字木戸沢　115 (0185－83－2311)
10月18日(日)		地蔵田遺跡 秋田県立博物館 秋田城跡・(秋田城跡出土品収蔵庫)	
	昼食	秋田市大町	稲庭饂飩　無限堂 稲庭饂飩を中心とした料理を予定
		秋田県民族伝承館	
	15時　3分	JR秋田駅出発	こまち 22号　（14号車）
	18時 42分	JR大宮駅到着	

払 田 柵　　所在地　秋田県大仙市払田仲谷地95



払田柵跡は秋田県の内陸中央部の大仙市（旧仙北町※1）・美郷町（旧千畑町※2）に位置する。払田柵跡はこの地に9世紀初頭に創建され、10世紀後半まで存続した。払田柵跡は多賀城・秋田城跡と並び称される古代城柵遺跡としての規模と威容を誇るが、当時どのような名称で呼ばれていたのか明らかではなく謎の遺跡でもあります。柵跡の名が冠されたのは、最外側の区画施設（外柵）が柵木塀（材木塀）であることに由来する。柵木は約30cm角に加工した秋田杉で、外柵は二つの丘陵を取り囲むように東西1370m、南北780mの長楕円形状に、立て並べている。柵木の長さは、倒壊した柵木が良好な状態で発見されたことから、地上高は3.6mであったことが判明している。

払田柵跡は1974年より通年学術調査を実施しており、現時点までおおよそ次のことが判明している。政庁は中心施設であるが儀礼的な場であり、実務的な場（建物）は政庁からやや離れた長森丘陵東側に置かれたと思われている。対する西側丘陵域は主に鉄・銅などの金属の生産や加工の場として利用され、工人集団の作業場兼居住域であったことが判明しつつある。外柵で囲まれた広大な低地は当初、耕地が広がり馬が放たれ、兵士・農民が居住する空間と推測されていたが、実際には複数の川が流れ、河川敷・湿地が広がる所であり、居住には適さない場の多いことが明らかになりつつある。しかしこの区域は水や火を用いて行う祭祀には好都合の場であり、近年祭祀関連の遺構・遺物が多く発見されている。このように払田柵は軍事的、政治的な要素を兼ね備えた国の役所であるとともに、柵内では鉄の生産や鍛冶、さらには祭祀もとり行われていたと思われ全体像が徐々に明らかになってきている。



政庁跡

払田柵は外柵と外郭から成り立っている。外柵は真山丘陵と長森丘陵を楕円形に包み込む外柵によって区画される中から外郭を除いた範囲で、真山丘陵と沖積地からなる。外柵は角材列から成り、東西南北4箇所に門を構え、東西1，370m、南北780mに及ぶ。柵内の範囲の面積は約875，000㎡である。

外郭は長森とその北側にある低地によって構成される。東西765m、南北320mの長楕円形で、面積約163，000㎡、外郭線の延長は約1，760mである。

区画施設は地盤の堅固な丘陵裾部が築地土塀、軟弱な低地が角材列で、両者は連続して外郭線を形成し、外柵と同様に東西南北4箇所に門が開く。

外郭の中央部には政庁が存在する。政庁は削平と盛土によって平坦地を造成し、板塀によって方形・長方形に区画した中に、正殿、東・西脇殿が配置され、これらの建築と政庁南門によって囲まれて広場がある。主要建物の変遷は五期に区分されている。

出土品

○土器　払田柵跡の中からは、さまざまな遺物が出土する。最も多いのは素焼きの土器類で、用途によって様々な形態があり、食器としては杯・皿・高杯など、貯蔵するための甕・壷、煮炊きに使う甕などがある。これらは竪穴住居のほか、土坑の中に一括して廃棄した状態で出土したり、単独で屋外から出土したりもする。住居のカマドの支脚として、小型の甕を使う場合もある。

○木製品　ホイド清水や、外郭南部を流れる河川跡の中からは、木製品が出土する。ロクロで挽いた皿、曲物容器、細い串、箆、箸などで、漆塗りの椀の破片もある。服飾品の檜扇、まじないに使用した斎串、糸枠の支え木も出土している。

○金属製品　金属製品の出土はいたって少ないが、これまで鏃、刀子（ナイフ）、農具である鋤の先、刀の柄頭の金具などがある。

○文字資料　払田柵からは、木簡・墨書土器・漆紙文書等の文字資料も多数発見されている。出土した木簡の中には、小針（尾張）の某という人物が、調米として米5斗を納めたことを記す貢進物付札も発掘されている。秋田城出土木簡の中にも尾張のウジ名を持つ人物が見え、『続日本紀』和同7年10月の記事にの出羽国に尾張国の民が柵戸として移配されている記録と符号する。尾張国と出羽国との関連を示す史料である。

払田柵総合案内所

払田柵総合案内所は、払田柵跡の外柵南門、大路、橋等の復元整備にあわせて設置された。案内所では、80インチ・マルチビジョンで払田柵跡の概要を説明。アニメを交えたわかりやすい内容となっている。案内所には払田柵の1／500地形模型や1／5外柵南門模型や出土品、写真パネル等が展示されている。

金澤柵

金沢城は、横手盆地中央東縁、厨川左岸の丘陵先端（標高170m・比高90m）に築かれた山城で、頂部を主郭に、主郭の北西側に二の郭を、二の郭の北東側尾根に北郭を、二の郭の南西側尾根には西郭を配置し、二の郭を中心に十字方向に郭が配置されていたと考えられる。 金沢城は、後三年の役(1083～7)で源義家・藤原清衡に攻め滅ぼされた清原氏の居館金沢柵に比定され、築城は古代出羽を支配した清原氏とされている。

金沢柵の中心は独立した岩山からなり、周囲約4kmは断崖で、また北側には厨川が流れており、天然の要害をなしていた。また、柵の守りはかたく、難攻不落の山城であった。（1087（寛治元）年11月14日の明け方に兵糧攻め陥落した。）

現在はサクラやツツジの名所にもなっている金沢柵跡には、かつての戦いの跡が残っている。山頂近くの二の丸跡にある金沢八幡宮は、清衡が義家の命により、1093年、京都の石清水八幡宮を勧請して創建したとされ、毎年9月14日の祭典宵宮に行われる掛け歌行事（県民俗）で知られる。16歳で初陣し、多くの敵を討ち取った鎌倉権五郎景政が義家の命で敵兵を弔った所という景政功名塚や、焼米の出土した兵糧倉跡など、多くの史跡がある。

金沢八幡宮

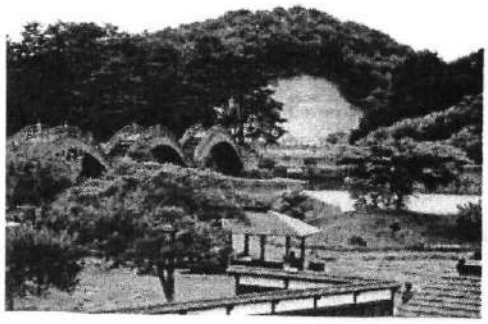
沼柵跡

沼館城は、横手盆地の中央西部、雄物川右岸の河岸段丘（比高10m）先端に位置する平城で、後三年の役で清原氏の本拠とされる沼の柵と同じ場所に位置する。後三年の役に際し、家衡は、出羽国の沼柵（現、横手市雄物川町沼館）に帰り、戦いの準備を始めていたが、義家軍が出羽に攻めてくると、家衡は叔父武衡の助言で、沼柵から金沢柵に本拠地を移し抗戦した。沼館城は大きくは三郭からなり、南側から主郭・二の郭・三の郭と梯式に郭配置がされていた。沼館城の周囲は雄物川の氾濫原の低湿地帯で、自然の外濠であった。沼館城は、築城時期は諸説あり、正安2年(1300)に小野寺道有が、寛正年間(1460～6)に小野寺道春（沼館孫三郎）が築いたとされる説がある。現在は、本丸は藏光院、二の丸は沼館小学校、三の丸は沼館中学校となっており、郭・土塁・堀が残る。

藏光院

平安の風わたる公園

「雁行の乱れ」で有名な後三年の合戦（役）の古戦場・西沼のほとりに広がる歴史公園です。合戦の主役の武将たちのブロンズ像、レリーフ等が、訪れる人々を平安の時代へといざなってくれます。沼にかかる雁橋（かりがねばし）が水面に美しく映えます。



後三年の役金沢資料館

金沢柵跡と伝えられる山なみを背景に、三重の宝塔をモチーフにした建物の内部には、金沢柵跡出土品・縄張図をはじめとし、郷土の文人・戎谷南山の模写による『後三年合戦絵詞』や、県指定文化財の中世仏教にかかわる経塚の資料や金沢八幡宮所蔵の大般若波羅密多経など、郷土の歴史資料を展示しています。

「みちのくの小京都」角館

秋田県仙北市の角館町は、仙北平野の北部に位置する城下町である。玉川と桧木内川に沿いに市街地が拓け、三方が山々に囲まれたこの町は、歴史ある武家屋敷と桜並木が美しく、まさに「みちのくの小京都」と呼ぶにふさわしい風情を漂わせた観光名所である。角館の今に続く町並みをつくったのは芦名（あしな）氏で1620年（元和6年）のことである。町は「火除（ひよけ）」と呼ばれる広場を中心に北側は武家屋敷が建ち並ぶ「内町（うちまち）」に、南側は町人や商人が住む「外町（とまち）」に区分された。このかつての町割りが390年あまりたった今でもほぼ変わらず残っており、「内町（うちまち）」には、築200年近い屋敷が建ち並び黒板塀に垂れ下がるしだれ桜が続きます。この武家屋敷群の表通りは、国の重要伝統的建造物群保存地区の指定を受けており文化財として保護されています。「外町（とまち）」は、「内町（うちまち）」と対照的にひっしりと商家などの町並みが続き、歴史を感じさせています。古い建物や土蔵も数多く残り、町の人はこの空間を大切にしながら店舗やレストランなどに活かしている。

秋田内陸縦貫鉄道

秋田内陸縦貫鉄道は、秋田県北秋田市の世界一の大太鼓の里にある鷹巣駅からマタギの里の阿仁合駅を抜け、秋田県仙北市のみちのくの小京都、角館駅までの94.2kmを結ぶ、第三セクターのローカル鉄道です。路線名通り、秋田県の内陸部を南北に縦貫する秋田内陸線（あきたないりくせん）とは、秋田県北秋田市の鷹巣駅から仙北市の角館駅に至る秋田内陸縦貫鉄道が運営する鉄道路線である。旧国鉄の特定地方交通線である阿仁合線（あにあいせん）、角館線（かくのだてせん）及び日本鉄道建設公団建設線（鷹角線、ようかくせん）を引き継いだ路線である。

歴史

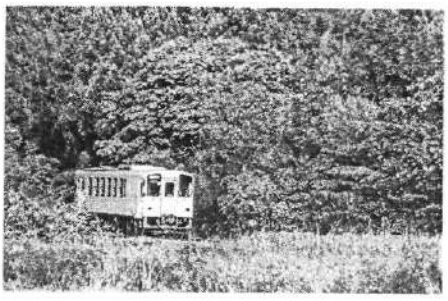
秋田内陸縦貫鉄道は、改正鉄道敷設法別表第13号に掲げる「秋田県鷹ノ巣ヨリ阿仁合ヲ経テ角館ニ至ル鉄道」である。日本三大銅山の一つであった阿仁鉱山から産出される鉱石輸送のため、大正11年「秋田県鷹巣より阿仁合を経て、角館に至る鉄道（鷹角線）として建設計画が決定し、昭和9年、まず鷹巣～米内沢間が開業した。続いて昭和11年には阿仁合まで、そして昭和38年には阿仁合～比立内間が開業し、全長46.0Kmの国鉄阿仁合線として営業を開始した。

一方、角館～松葉間の19.5Kmは、昭和45年国鉄角館線として開業し、両路線は昭和61年10月末まで営業された。鷹角線の未開通部分松葉～比立内間の29.3Kmの早期開通が望まれ、昭和55年「日本国有鉄道経営再建促進特別措置法」に伴い、建設工事が中断されたが、昭和59年10月全線開通を熱望する沿線8町村と県は、産業、経済、観光の振興に鉄道の開通は欠かせないとし、阿仁合線、角館線と建設線を引き継いで一体運営すべく1984年に第三セクターによる秋田内陸縦貫鉄道株式会社を設立し、未開通部分の工事に取り組んだ。

平成元年4月、大正11年に建設計画が決定してから半世紀以上を経て、沿線住民の念願であった鷹巣～角館間94.2Kmはついに全線開通となった。

存続か廃止か

2008年9月、秋田県庁で寺田知事、北秋田市の岸部陞市長、仙北市の石黒直次市長らが秋田内陸線の存廃問題を協議した結果、2012年度まで内陸線を存続させることで合意した。同年度までの5年間の経営実績を踏まえ、存続させるかどうかを再度検討するとした。また、内陸線の安全対策工事費などの補助金を国から得て、2009年度から事業を始め、内陸線の老朽化した橋やトンネル、線路の改修、車両の修理に充てるとのこと。だが、依然として厳しい経営が続いていることには変わりない。



根子集落

この地の住人は根子集落を“平家の落ち武者が開いた村だ”と言う。この説には他説もあって、源氏（義経家来）の末裔の開いた集落という説もある。真偽の程は定かではないものの、まるで人目を避けるかのように、険しい山を隔てた盆地に、ひっそりと住み着いて切り開かれた集落であり、確かにこの集落だけはポツンと別世界のような雰囲気がある。また、根子はマタギの里としても有名で現在でもマタギ文化を継承している人達がいるようである。通常マタギは「里マタギ」と言って自分達の住んでいる地域（縄張り）を中心としているのですが、根子では「旅マタギ」と言って全国に展開しています（そのため山の奥に居ながら中央の情報をいち早く知る事が出来た）。その風習や言葉（マタギ言葉は通常の言葉ではなく暗号の様でマタギの最中は通常の言葉を話す事が出来ない。そのことから、マタギ隠密説もある。）など、かなり独特で解明されていない事が多い。

マタギとは

マタギは、東北地方・北海道で古い方法を用いて集団で狩猟を行う狩猟者集団。一般にはクマ獲り猟師として知られるが獲物はクマだけではない（後述）。古くは山立（やまだち）といった。特に青森県と秋田県のマタギが有名である。その歴史は平安時代にまで遡るが、近代的な装備の狩猟者（ハンター）とは異なることに注意する必要がある。森林の減少やカモシカの禁猟化により、本来的なマタギ猟を行う者は減少している。マタギの語源は諸説あって不明である。最も有力なものは、アイヌ語で「冬の人」・狩猟を意味するマタンギ・マタンギトノがなまったものだという説である。ただし、日本語のマタギという語が先にあり、この語がアイヌ語に取り入れられたという説もある。

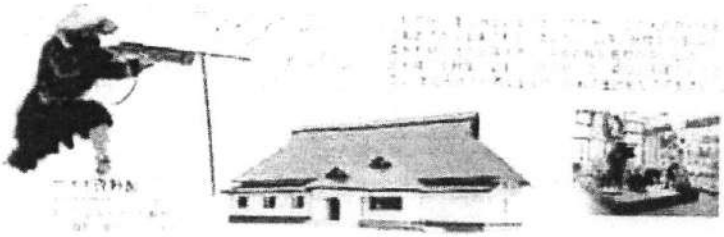
主なマタギ集落

日本の各地に『マタギ』という組織や、マタギ集落があります。田口先生や柳田國男先生の調査の結果、秋田県阿仁町にある打当、比立内、根子の各集落から旅マタギとして各地に出かけたマタギ達が、肉や毛皮、薬などを販売しながら、狩猟の技術、製薬方を伝授し、そして滞在した地に所帯を持ってマタギ集落を形成した事がわかりました。（古文書や墓石などを追跡調査したそうです）

青森	西目屋村、岩坂
岩手	沢内（西和賀町）
秋田	阿仁・根子・笑内・打当（北秋田市）、戸沢（仙北市）
山形	大鳥（鶴岡市）、五味沢・長者原・小玉川（小国町）
新潟	三面（村上市）
新潟・長野	秋山郷（津南町・栄村）

マタギ資料館

秋田県阿仁町打当にあるマタギ資料館には、県民俗文化財に指定されている鉄砲をはじめ、マタギの生活ぶりや衣裳、狩猟道具126点を中心にマタギに関する資料が展示されています。また、おもに狩りをした動物の剥製も展示され、生態系も知ることができます。我が国で唯一のマタギ資料館である。



根子番楽

「番楽」は、かつて修験道の山伏たちによって行われていた神楽ですが、根子番楽（ネッコバンガク）は、平家一族の小池大納言炊之輔の家臣が越後の三面、下野の日光とこの根子に離散し、番楽もこれにより伝えられたといいます。土地では武士舞・荒舞・獅子舞とも呼ばれています。毎年8月14日に公開されているこの番楽は、東北地方各地に伝わる山伏神楽の中にあって、歌詞の内容が文学的に優れていることと、舞いの形式が能楽の先駆をなす幸若舞（コウワカマイ）に類似する要素があることから賞賛され、古式を現代によく残している能楽のひとつであると関係各界から注目されてきました。勇壮活発な武士舞いと古雅で静かな古典的舞いの2つに大別され、平成16年に国の重要無形民俗文化財に指定されています。

伊勢堂岱遺跡

伊勢堂岱遺跡（いせどうたいいせき）は、秋田県北秋田市（旧鷹巣町）脇神の標高40～45mの台地上に位置する縄文時代後期前半の遺跡である。この遺跡は平成7年度大館能代空港へのアクセス道路建設の際に発見された。遺跡を埋め戻すことも考慮されたが、遺跡の重要性からアクセス道路の進路を曲げて、この遺跡を保存しさらに発掘することを決定した。保存状態が良く、学術的な価値が高いことから2001年1月、国の史跡に指定された。

特徴

縄文時代後期の遺跡で、A～Dの4つのストーンサークルや掘立柱建物跡、土坑墓、土器埋設遺構、捨て場、フラスコ状土坑、日時計型組石などから構成されている。4つのストーンサークルからやや離れた場所に、日時計型組石が数個ある。これは大湯環状列石と同じように、この組石の中心からストーンサークルAを見ると、夏至の日に太陽が沈む位置とだいたい一致する。

ストーンサークルAは直径が約32mで上空からの平面形がメロンのような形をしており、つるの部分が特徴的である。祭祀の際の特別の通路として機能していたのではないかとの指摘もある。

ストーンサークルBは円ではなく欠けた弧状をしており、これは国鉄阿仁合線（現在の秋田内陸縦貫鉄道）の建設時に壊されたものであると考えられる。または、未完成のストーンサークルだとする見解もある。

最大のストーンサークルCには石を縦横に組み合わせた構造もあり、これは、青森市の小牧野遺跡の小牧野式配石と呼ばれるものと共通する珍しい配石である。直径が45mもあり列石の輪が三重になっている。周囲には6本柱の掘立柱建物跡があり、これは大湯環状列石にも共通するものである。

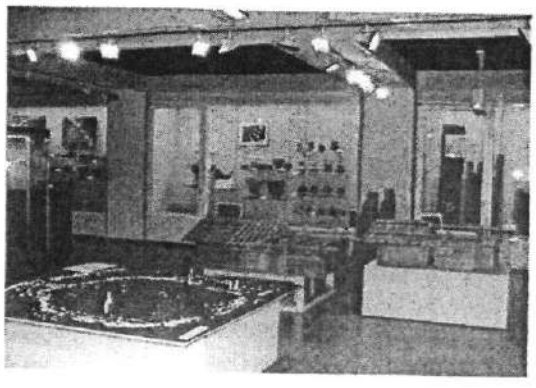
新たに発見された直径約36mのストーンサークルDは現在発掘中である。

立石（日時計様組石）や列石に建物が附属する点では大湯環状列石との共通点があり、また、小牧野式配石もみられる本遺跡は、同一遺跡のなかで異なる文化要素をあわせもっている点で着目される。

ストーンサークル近くの沢やフラスコ状土坑からは板状土偶やヒョウタン型土器、キノコ型土製品なども発見されており、捨て場や貯蔵穴の墓への転用が考えられる。土坑墓には土器や石器が供えられていることが多く、共同墓地と個人用墓地との関係や再葬の可能性などについては、今後もひきつづき検討を要する。大湯環状列石では立石下に死者が埋葬されているが、伊勢堂岱遺跡では丸く配置されている石の中央に死者が埋葬されている。

北秋田市文化会館

文化会館の中には遺跡展示室があり、藤株遺跡、伊勢堂岱遺跡、胡桃館遺跡（平安時代後期の埋没遺跡）などの発掘遺物が展示されております。

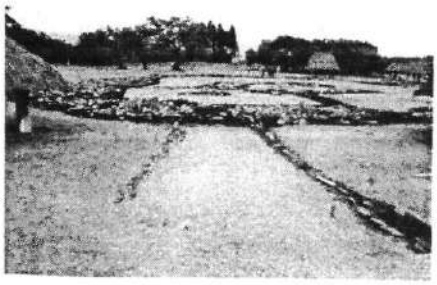


大湯環状列石

大湯環状列石は、ストーンサークルや環状石籬（かんじょうせきり）とも呼ばれ、秋田県鹿角市十和田大湯にある縄文時代後期の大型の配石遺跡であり、1931年に発見された。現在は国の特別史跡に指定されている。遺跡は約130メートルの距離をおいて東西に対峙する野中堂と万座の環状列石で構成されている。この遺跡は、山岳丘陵の末端にのびる舌状台地の先端部に造られており、河原石を菱形や円形に並べた組石の集合体が外帯と内帯の二重の同心円状（環状）に配置されている配石遺構である。
その外輪と内輪の中間帯には、一本の立石を中心に細長い石を放射状に並べ、その外側を川原石で三重四重に囲んでいる。その形から「日時計」といわれており、万座と野中の両方の遺跡にある。

大きい方の万座遺跡の環状直径は46メートルもあり現在発見されている中で日本で最大のストーンサークルである。組石は大きいほうの万座では48基、野中堂のほうは44基ある。それぞれの組石の下に墓壙があることから共同墓地と考えられている。中央の立石は大湯の東方約7～8キロにある安久谷（あくや）川から運んだと推定されており、労働力の集中が見られる。
遺跡の使用目的に関しては諸説あるが、近くには構造が似ている一本木後口遺跡があり、これは墓であることが調査によって明らかになっており、また配石遺構の下から副葬品をともなう土坑が発見されたため大規模な共同墓地と考えられている。さらに1948年から始まった万座の周辺調査から掘立柱建物跡群が巡らされていたことが明らかになり、これらは墓地に附属した葬送儀礼に関する施設ではないかと推測されている。

大湯環状列石には日時計状組石があり、この日時計中心部から環状列石中心部を見た方向が夏至の日に太陽が沈む方向になっている。このような組石は北秋田市の伊勢堂岱遺跡にもある。

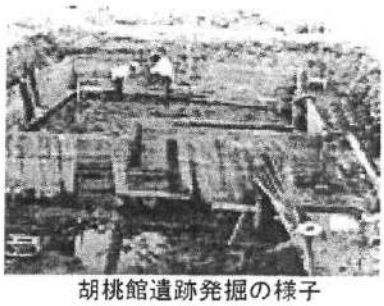


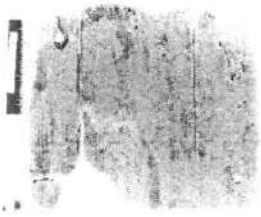
藤株遺跡

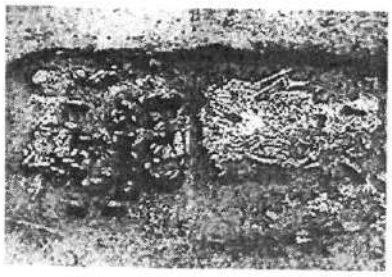
藤株遺跡は、摩当山山地が小猿部川と小森川によって開析された標高40m前後の段丘上に位置する。遺跡西側に湧水池が二ヶ所、北側には中堤（鷹巣中央公園）という湖沼があり、周辺には縄文時代前期～晩期にいたる各時期の遺跡が点在する。藤株遺跡は、明治19年内田清太郎氏が学会に発表以来、次々に中央の学界より調査に訪れた全国的に知られた遺跡の一つである。昭和55年に国道101号線鷹巣バイパス工事に際し、バイパス敷設部分の8千平方メートルについて発掘調査がおこなわれた。その結果、竪穴住居跡や107基の土抗墓がみつかった。土器や石器などの出土品も整理箱で400箱と相当な量が出土し、特に縄文時代晩期の土壙内で女性と考えられる人骨が発見され、多くの文化財関係者の関心を集めた。推定年齢は成年ないし熟年、骨の状態は、強い火をうけ変形しており、火葬され埋葬されたものと推測されている。現在遺跡は埋め戻されている。

胡桃館遺跡

胡桃館遺跡は、延喜15年（915）の十和田火山噴火に伴う火山噴出物ならびにその河川堆積物に埋没した10世紀頃の、住居及び官衙的な性格をあわせもつ遺跡と考えられている。同遺跡の発掘については、昭和33年鷹巣中学校の新築工事に伴うグランド整備の際に、須恵器と土師器が出土した。その後、鷹巣陸上競技場を造成する際に、土師杯などとともに掘立柱や貫穴のある角柱が見つかり昭和41年～43年まで発掘調査が行われた。その結果、四脚門跡と思われる遺構や棚列2種・建物4棟などが発見され、墨書のある板や墨書土器などが出土した。現在遺跡は埋め戻されており、遺構には胡桃館埋没建物収蔵庫が建てられている。
平成17年出土した木簡には、北東北で朝廷に敵対した蝦夷（えみし）とみられる人たちに対し、朝廷の役人が米を支給したことを示す墨の文字が書かれていたことが判明した。これら出土品は、現在県の有形文化財に指定されている。


胡桃館遺跡発掘の様子


判読された木簡

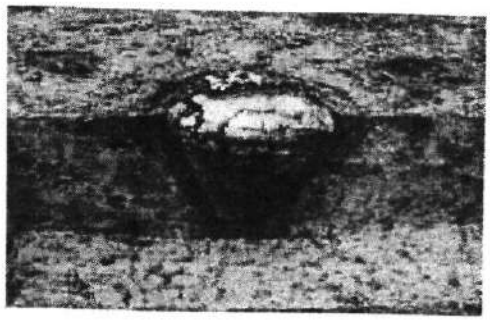

藤株遺跡より出土の人骨

地蔵田遺跡

蔵田遺跡(じぞうでんいせき)は、秋田市南東部にある御所野台地の南端、標高31m前後の東西に長い舌状台地上に立地する旧石器時代・縄文時代・弥生時代の遺跡である。昭和60年に秋田市教育委員会が発掘調査し、旧石器・縄文・弥生時代の複合遺跡であることがわかっています。日本初の「市民の手づくり史跡整備」の例としても知られ、特に注目されたのが木柵で囲まれた弥生時代前期の集落跡で、平成8年11月6日に国の史跡に指定されました。発見された遺構は、竪穴住居跡4軒、木柵跡3条、土器棺墓25基、土壙墓51基です。出土した土器の中には、北九州地方の影響を受けた遠賀川系土器も含まれており、東北日本海沿岸北部に早くから弥生文化が伝わったことがわかり、東北地方北部における稲作農耕文化の成立過程を知る上でも重要な遺跡として位置付けられている。

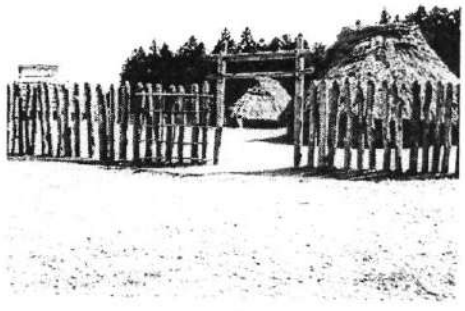
遺跡全景(復元前)

遠賀川系土器



土器棺墓

地蔵田遺跡の弥生集落は、居住域の周囲を木柵で楕円形に囲み、その周辺に墓域や捨て場(不用品の廃棄場)を配しており、弥生時代における西日本の環濠集落の基本的な構造と類似する。防御施設をともなう弥生時代の遺跡としては日本列島で最も北に所在し、また、木の柵がめぐる構造の集落は東北地方はもとより全国的にもあまり他に類例がなく、この遺跡の大きな特徴となっている。

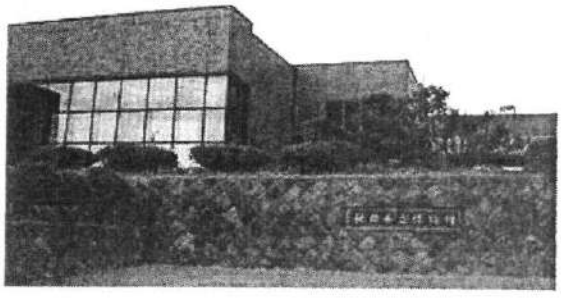


遺跡現況

遺跡の復元・整備について

従来の行政側が復元整備したものを、市民が活用するという行政主導型整備ではなく、市民と生徒が中心になって整備から参加し、活用していくという市民参加型整備をコンセプトに、少しでも多くの市民・生徒が手をかけた手づくりの史跡公園を計画しています。なお、この整備方法は文化庁としても初めてのケースであることから全国的にも注目されています。

秋田県立博物館



秋田県立博物館(あきたけんりつはくぶつかん、Akita Prefectural Museum)は秋田県の考古、歴史、民俗、工芸、生物、地質を展示する総合博物館である。また、「菅江真澄資料センター」と秋田県出身の偉人を紹介する「秋田の先覚記念室」が併設されている。昭和50年に開館した博物館ですが、開館から約30年が経過し、施設の老朽化、調査研究の進展、生涯学習の拠点としての役割の増大などの理由から、21世紀にふさわしい博物館像が求められるようになり、これを受けて平成14年度から展示の改編事業がはじまり、2年間の工事期間を経て、平成16年4月29日にリニューアルオープンを迎え現在に至っています。地上二階建て。一階の自然展示室には世界遺産白神山地の生物標本や、絶滅したクニマスの標本が展示されている。二階の人文展示室においては旧石器時代から現代までの秋田県の歴史を豊富な資料によって知ることができる。

秋田城跡

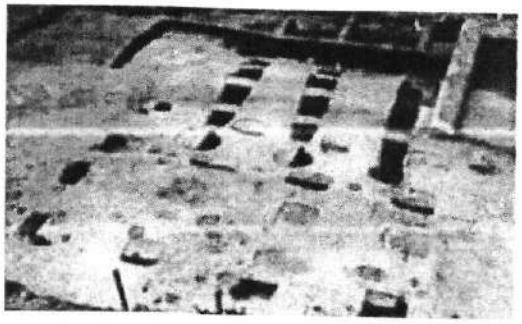
秋田城跡は奈良時代から平安時代にわたって東北地方の日本海側(出羽国)に置かれた大規模な地方官庁の遺跡で、古代の政治・軍事・文化の中心地であった。天平5年(733)に、秋田村高清水岡に遷された当初は「出羽柵」(でわのさく)と呼ばれ、やがて天平宝字4年(760)ごろに秋田城と呼ばれるようになる。奈良時代には出羽国の政治をおこなう「国府」が置かれ、また、津軽(青森)・渡嶋(北海道)のほか、大陸の渤海国(中国東北部)など対北方交易の拠点としても重要な役割を果していたと考えられている。北方の要として、平安時代に入り元慶2(878)年の蝦夷の人々による「元慶の乱」が起こり、939年(天慶2年)にも俘囚の蜂起により、秋田城が攻撃を受けている(天慶の乱)。このように、秋田城は被害を受けることが多かったが、発掘調査によると11世紀の遺構が確認されており、この頃までは存続が確認されているが、1050年前後の前九年の役の影響で秋田城介が城に常在しなくなった頃より次第に衰退したと考えられている。
昭和14年には、遺跡の重要性が認められて約90ヘクタールが国の史跡に指定された。

秋田城全景

秋田城跡の発掘調査

秋田城跡の発掘調査は、1959年(昭和34)年に国により始められ、1972年以降現在まで秋田市が継続中である。これにより、外郭は東・西・南北とも550m、幅2m・高さ4mの瓦葺き築地塀がめぐらされていたことが判明している。護国神社の南広場からは郭内中央に設けられた東西94m・南北77mの政庁部が確認され、郭外内からは百数十棟の官人・兵士が住んだとみられる竪穴住居跡や掘立柱建物跡などが発見されている。
さらに外郭に東接する鵜ノ木地区では、巨大な掘立柱建物群や井戸跡、移城後まもない「天平六(734)年」銘の木簡が発見され、建物群は、四天王寺および渤海使のための迎賓館跡と推定されている。
膨大な出土品は、秋田城跡出土品収蔵庫に収蔵・公開されており、また、外郭東門跡に東門と築地塀などが復元されている。外郭跡一帯とその周辺は、西に日本海・男鹿半島、北東に太平山を望む高清水公園と整備されている。

復元された外郭東門と築地塀


水洗厠舎跡(現在建物も復元されている)

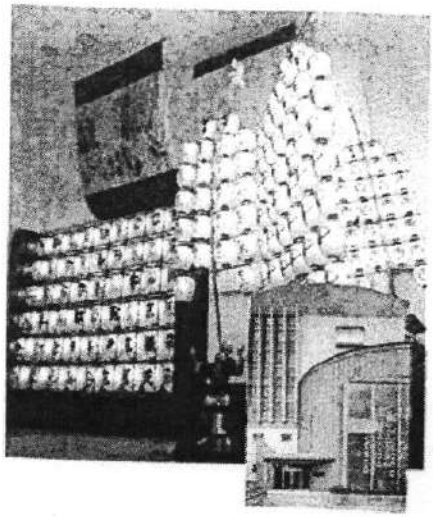
渤海

渤海(ぼっかい、698年 - 926年)は、満州から朝鮮半島北部ロシアの沿海地方にかけて、かつて存在した国。高句麗滅亡後にその遺民である大祚栄により建国され、周囲との交易で栄え、中国からは「海東の盛国」(『新唐書』)と呼ばれたが、最後は契丹(遼)によって滅ぼされた。渤海の名は本来、遼東半島と山東半島の内側にあり黄河が注ぎ込む湾状の海域のことである(→「渤海 (海域)」)。初代国王大祚栄が、渤海沿岸で現在の河北省南部にあたる渤海郡の名目上の王(渤海郡王)に封ぜられたことから、本来の渤海からやや離れたこの国の国号となった。

日本と渤海の関係

渤海と日本の関係は当初は新羅を牽制するための軍事的性格が強かった。また、渤海は、大武芸の時代には唐とも対立していた。その当時の緊張関係にあった新羅もまた唐に急速に接近しており渤海は国際的な孤立を深めていた。この状況下において、大武芸は新羅と対立していた日本の存在に注目し、727年、渤海は高仁義らを日本に派遣し日本との通好を企画する。この初めての渤海使は、日本に到着した時、当時の日本で蝦夷と呼ばれていた人々によって殺害され、生き残った高斉徳他8名が、翌年聖武天皇に拝謁した。この年引田虫麻呂を送渤海客使として派遣するなど軍事同盟的な交流が形成された。その後、渤海と唐の関係改善が実現すると、日本との関係はもっぱら文化交流的、商業的な性格を帯びるようになり、その交流は926年渤海滅亡時までの約200年間継続した。
渤海使(ぼっかいし)の記録は、728年から922年までの間に34回(一説には36回)の使節が記録に残っているが、うち6回は秋田に漂着している。

秋田市民族芸能伝承館

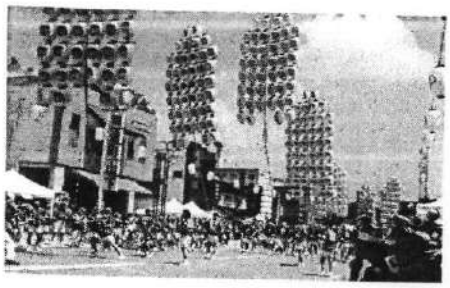


赤れんが郷土館の北400mほどの所に、秋田市民俗芸能伝承館(ねぶり流し館)がある。赤れんが館の分館であり、竿燈や土崎神明社祭りの曳山行事、秋田万歳・番楽・梵天などの民俗行事・芸能の保存・伝承・後継者育成のための練習・発表の場として1992(平成4)年に開設された。3階までの吹き抜けの展示ホールでは、竿燈・曳山・梵天の実物を展示しており、竿燈の実技に挑戦できる。また、4～10月の土・日曜日と祝日には竿燈の実演が行われる。

竿燈とは

竿燈(かんとう)は、毎年8月3日～6日に秋田県秋田市で行われる祭り。ねぶり流し行事として行われている竿燈であるが、宝暦年間には原型があったといわれている。五穀豊饒や除災、技芸上達を願って、旧暦の7月7日にあわせて行われる七夕行事とともに、旧暦7月15日のお盆を迎え入れるために一連の行事として現在の形になったとも言われている。

竿燈全体を稲穂に、連なる提灯を米俵に見立て、額・腰・肩などにのせ、豊作を祈る。大若(おおわか)は提灯が46個、重さが約50kg。重要無形民俗文化財に指定されており、青森のねぶた祭り、仙台の七夕ま



竿燈の種類

大若(大人用)・・・重さ50kg、長さが12m、提灯の数が46個と非常に重い。

小若(小学生高学年～中高生用)・・・重さ15kg、長さが7m、提灯の数が24個である。女性が両手で持つのは厳しい重さである。

幼若(小学生低学年以下用)・・・重さ5kg、長さが5m、提灯の数が24個。こちらは大人なら誰でも持てそうな重さ。

古代の城柵について

7世紀中頃になると、中央では天皇を中心とした貴族が、律令をもとに支配体制を強めていった。東北地方では、太平洋側に陸奥国、日本海側に出羽国が置かれたが、その北方には国の直接的支配の及ばない広大な土地が拡がっていた。中央では都を造営するのと同時に、この北方の土地と、そこに住む人々を国家の領域の中に取り込んで行くことが、課題となった。そこで律令国家は、この支配領域の拡大と蝦夷の公民化を実現するための政策を展開した。

城柵は、国家がそうした政策を実行するために設けられたのである。陸奥・越後・出羽の三国では、諸国の守の職掌のほか、特別に「饗給、征討、斥候」の職掌が与えられていた。饗給とは、宴会を催し、禄物を与えて懐柔することである。征討とは、軍事力で蝦夷を討つこと、斥候とは蝦夷の動向を探ることである。これが律令国家の蝦夷政策の基本であった。城柵には国司四等官、史生、鎮官などの中央派遣官が城主あるいは城司として駐在した。城司の下には兵士が駐屯していた。律令制支配が浸透せず、まだ国家に服属しない、より北方の世界の人々とは朝貢関係を保ち、物資の交易を行うことも重要な任務であった。さらに、沿海州方面の政治的情勢にも国家として対処しなければならなかったのである。城柵の中央部には、国府政庁に類似する構造の政庁があり、その周囲に実務的役割の建物が配される。それらの外周を築地、柵木、土塁などの外郭区画施設で囲み、それには櫓状建物が付設されることもある。政庁があるのは、城柵に中央からの派遣官が駐在して政務や儀礼を執り行うからである。外郭施設や防禦施設があるのは、城柵が軍事的性格をも合わせ持っているからである。城柵は、国家が北の辺境においてさまざまな政策を遂行するための拠点として造られた、行政と軍事の機能を合わせ持つ施設であったのである。

ストーンサークル

ストーンサークルは、石を環状に配置した古代の遺跡である。環状列石(かんじょうれっせき)、環状石籬(かんじょうせきり)ともいう。イギリスには巨石を使ったストーンサークルが多数あり、ストーンヘンジもストーンサークルである。環状列石に類する遺構として環状木柱列(かんじょうもくちゅうれつ)がある。金沢市新保本町のチカモリ遺跡では直径50～85cmのクリ材による直径7メートルの遺構、富山県小矢部市の桜町遺跡では縄文晩期の直径30～60cmのクリ材10本を使い直径6メートルの遺構など全国で10数例が見つかっている。これらは環状木柱列(ウッドサークル)と呼ばれている。これらは墓地遺跡ではなく祭祀遺跡の可能性の方が強い。